様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年　３月３１日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：２０１１～２０１２
課題番号：２３６５２０１２
研究課題名（和文）戦後ドイツにおける記憶の政治と記念碑
研究課題名（英文）Memory Politics and Monuments in Postwar Germany
研究代表者
中尾　健二（ＮＡＫＡＯ　ＫＥＮＪＩ）
静岡大学・情報学部・教授
研究者番号：７００２２３１６

研究成果の概要（和文）：先ず「記憶の政治」にかかわるベルリンにおける記念碑などの諸施設をつぶさに視察し、その歴史的な変化を目のあたりにすることによって、それがどのような方向へ向かっているのかを体験でき、さらに考察のための多くの資料を収集することができた。次にこれら資料を整理・編集し、講義ならびにドイツ語の授業に取りいれ、授業の活性化ならびに受講生の歴史認識の啓発に資することができた。

研究成果の概要（英文）：First by this time visitation of monuments concerned with *Memory Politics* in Berlin I was able to have some experiences on their historical changes and to collect some materials which I can use for a deliberation on this problem. Secondly by editing of these materials I was able to take up this problem into my lectures and German classes. It contributed to activate my classes and to enlighten my students about how to appreciate the recent past.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：政治思想史・公共圏

１．研究開始当初の背景

(1) これまで何度か、一度は文部科学省在外研究員として、またその後数回は私事渡航でドイツ連邦共和国の首都ベルリンに滞在した。その際その地にある主要な記念碑の類を必ず訪れ、その施設から読み取ることができる「最近の過去（ドイツであればナチス政権下、日本であれば15年戦争の時代）」に対する彼我の認識の違いに心を動かされた。そして、この問題を継続的に追い続けたいと思ったことが、この研究の背景であり、動機である。

(2) これら施設の重要な側面である表象芸術性が、公共圏（世論形成）において重要な機能と意義をもっていることを明らかにしたいと考えた。一例を挙げれば、国立の追悼施設であるノイエ・ヴァッヘ（Neue Wache）にはケーテ・コルヴィッツの「死んだ息子を

抱く母」像が拡大・複製されて置かれている。ポツンとそれだけが置かれているわけだから、入り口に掲げられた碑文（テクスト）とともに、この像こそが何かを語っている、あるいは何かについては語ろうとしていないと考えざるをえない。歴史的記述にテクスト解釈とともに美術批評を組みこまないと何事も始まらないわけである。

忘れることのできない思い出がある。2005年夏に短期で私事渡航した際に、ベルリン地区のナチス時代の記憶にかかわる施設を見て回り、写真を撮ってきた。その直後の9月に浜松西高の1年生が「国際理解」という総合的学習の一環として大学キャンパスを訪問した折に、模擬講義をすることになり、「過去とのかかわり方―ドイツの場合―」と題して、これらの写真を見せて、主観を交えず簡単な説明を加えたのであった。高校生たちはその後、附属図書館で1時間ほど時間を与えられて、この講義についてのレポートを書かされたのであるが、何人かの生徒はきわめて激烈かつ感動的な文章を書いてくれた。戦後日本が抑圧してきたもの―加害の歴史―がいかに大きなものであるか、そしてそれによってわれわれの歴史意識に空白が生じていることを高校生の文章は正確に撃っていたように思う。抑圧されたものの回帰であるから激越であり、それを克服しようとする意志ゆえに感動的なのであった。これと同時に写真を通じてであれ、その無言のイメージ（表象性）がもっている雄弁性についても、確証をえられたように感じたのである。

(3) 従来記念碑の類は、歴史学を中心とした人文・社会科学的アプローチと美学・芸術批評的アプローチが別個に追究してきたのではないだろうか。前者であるとコンテクスト中心となって、対象そのものの分析・評価に欠けるところがあり、後者であると対象そのものに言及されるものの、それがいかなる政治的・社会的コンテクストで意味づけされているかの記述に欠けるところがあった。本研究ではそれらを統合するような視点から対象を記述し、その方法論の洗練をめざしたい。同時にこうした研究をつうじて、従来は討議(Diskurs)中心に理解されていた公共圏概念の拡張を試みる。公共の場での美的な(aesthetisch)作用連関を考慮せざるをえないからである。これによって現在に適合する公共圏概念の提示が見込まれる。図で示せば下記のようになる。

人文社会科学的アプローチ
↓　↑――→公共圏における表象
美学・芸術批評的アプローチ

図１

さらに本研究課題とは直接関係ないように見えるが、実はDVDなどの映像教材を投入したドイツ語の授業実践から本研究課題が動機づけをえた面がある。大学における外国語教育には、語学的訓練の面があることはもちろんであるが、同時に当該言語圏の文化と社会に対する知見を学生にあたえることによって学習面での相乗効果が期待できる。長年にわたる授業経験から映像教材に対する学生の評価はきわめて高いことが立証されている。こうした教材研究の過程で、50年代の劇映画と 90 年代以降のそれとを比較すると、背景にあるドイツ社会のメンタリティ自体がおおきく変化しているのではないかという思いにとらわれる。Siegfried Kracauer が映画研究では古典的な著作である Von Caligari zu Hitler で述べているように、映画は集団的制作と集団的受容という性格から当該社会の深層心理を反映しやすい。一般の映画は＜市場＞を媒介として制作・受容されており、Kracauer の方法論は依然として有効なところがある。ところが、本研究課題が取りあつかう記念碑を中心とした施設は、国家あるいは自治体、つまり＜行政＞によって企画・建設されることが多い。映画と比較すると、より国家の意思なり公共圏の意思が直截に反映される。同じ表象芸術でありながら、映画とはいささか異なった社会的コンテクストに置かれている。これは映画研究と公共圏研究とをつなぐ媒介環の位置にあると言っていい。さしあたりの作業仮説として図２を示す。Diskurs 中心的な公共圏概念をなんとか拡張できないかという思いがあった。

映画＜市場＞←－－→公共圏＜政治文化＞
↑　↑
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
↓　↓
記念碑＜行政＞

図２

２．研究の目的

対象をドイツ連邦共和国首都ベルリンにおける「記憶の政治」のための諸施設にしぼり、記憶のためのもろもろの施設（記念碑、警告碑、建築物、彫刻、オブジェ・・・）が、いかなる政治文化を背景に設立されるにいたったか、またそれらの施設がどのように人びとに受容され、いかなる政治文化の涵養につながっているかを明らかにすることが、本研究の目的である。

３．研究の方法

こうした施設（ドイツではこれら施設は

Gedenkstaette「想起の場」と呼ばれている）はドイツ国内にほとんど無数にあり、それらを網羅的に対象とすることは困難であり、研究の凝集性からいっても疑問が残る。したがって、本研究ではドイツ連邦共和国の首都ベルリンにある、いくつかの代表的な施設を取りあげ、いわばモデルケースの記述を通じて全体像の輪郭を浮かび上がらせるという方法をとった。

初年度（2011 年度）は、現地視察を中心に組み立て、写真やビデオを撮影し、各施設のパンフレット類を収集し、これらの整理・編集作業を行った。

最終年度（2012 年度）は、これら「記憶の政治」にかかわる、とくにベルリンにある諸施設に関係する日独の文献の収集と、さらにこれらに基づく考察をすすめた。

４．研究成果

2011 年年末から 2012 年年頭にかけて科研費による現地視察を行うことによって、いくつかの施設の経年的変化を知ることができたことは大きな収穫であった。顕著な実例を以下に挙げたい。

写真 1a

(1) グルーネヴァルト駅 17 番線

かつてベルリン在住のユダヤ系市民はここに集められ、ここから各地の強制収容所に送られていった。今は廃線となっている 17 番線を 90 年代にドイツ鉄道株式会社が「想起の場」としてととのえたのである。ここ 10 年ほどで施設自体に変化はないが、訪れる人びとは着実に増加している。とくに犠牲になった関係者がいるイスラエルからの団体が多いようである。写真 1a に示すように、この 17 番線プラットフォームにはユダヤ系市民が強制収容所に送られた日ごとに一枚の鉄板がしつらえられ、そこに日付と人数、送られた強制収容所名が浮き彫りにされている。筆者が訪れた折にはある鉄板に一輪の花が挿されていた。おそらくこの日に送られた人の遺族か関係者であろう。

写真 1b

また写真 1b のようにプラットフォームの突端に以前からあるヘブライ語のタイトルにドイツ語の碑文を記した銘板には立派な花輪がそえられていた。これは以前見かけることがなかった。慰霊のための目的地として定着してきた証拠だろう。この一民間会社によって建設された「想起の場」は、訪れる人びとを着実に増やしているように見受けられる。

(2) ホロコースト警告碑

ベルリン中心部、ブランデンブルク門近くにある、いわゆるホロコースト警告碑（正式名称は「殺害されたヨーロッパ・ユダヤ人の

写真 2a

写真 2b

ための記念碑」）は、その正否はともかく着実に「観光地」としてのポピュラリティを獲得しつつあり、とくに外国からの見学者が絶

えないことは注目してよい。さまざまな高さのコンクリートの立方体（Stele「墓標」とも呼ばれている）を数千個置いた敷地から道路一本隔てたスペースは以前空き地であったのだが、今やカフェとみやげもの店の入った立派な建物がたってしまった。横のハンナ・アレント通りには観光バスがずらりと停車していることがしばしばである（写真 2a、2b 参照）。

(3) ザクセンハウゼン強制収容所跡

またベルリン郊外オラーニエンブルクにある、ザクセンハウゼン強制収容所跡は、見学者のための施設・設備が年々拡充している。1999 年にここを初めて訪れた時には写真 3a にあるような「想起の場・ザクセンハウゼン」

とある壁もその背後にある立派な案内所も

写真 3a
写真 3b

なく、ここからしばらく収容所の壁づたいに歩いて正門を入ってすぐ右手に小さな木造の小屋があり、そこにパンフレット類が置かれていただけであった。さらに今回敷地の内部に入っていくと「Arbeit macht frei」の文字をかかげた正門からドイツ民主共和国時代に建設された、敷地中央を横断する装飾的な壁が撤去されたことがわかるのである（写真 3b を参照）。これには「我が意を得たり」の感もあった。本来の姿を復元する方向で修復されつつあったのである。敷地の一番奥にあるソ連による巨大な解放記念塔はどうするのであろうか。

かつてドイツ国内の政治犯、ユダヤ系、同性愛者などのみならず、ヨーロッパ中からのそれらを強制収容していたザクセンハウゼン強制収容所は、いまやヨーロッパのみならず世界各国からの見学者が自発的にやってくる場となったのである。

三つの顕著な例を挙げてみたが、これらから推し量られることは、ドイツにおける「想起の場」が自国の戦没兵士の追悼のためではなく、自国の政府ならびに兵士たちによって被害を被った人びとの追悼のために設置されており、したがってそれら被害を被った国々からの見学者も数多く訪れていることである。「加害の歴史」を残そうとするドイツの意志、世論と行政の意志を感じるし、それが国際的にも評価されているのである。

これらの見聞は写真やビデオなどの収集された資料とともに、学際科目「異文化と出会う」やドイツ語の授業実践に活用することで授業の活性化をはかることができた。これらの授業におけるレポートや授業アンケートなどから判断すると、受講生にここに孕まれている問題を自発的に考えさせるという点ではきわめて効果的であったと評価できよう。これもこれら「想起の場」がもつ表象性が大きく影響している。無言のメッセージが「物」を通して伝わるのであろう。公共圏においては、「物」としてあることが大きな影響力を行使していると考えざるをえないのである。

目下今回の研究課題は、収集した資料の授業への活用の段階に留まっているが、今後は収集した内外の文献にもよりながら論文等で自分自身の考察も形にしていきたいと考える。

５．主な発表論文等

なし。

６．研究組織

(1)研究代表者

中尾　健二（NAKAO KENJI）

静岡大学・情報学部・教授

研究者番号：70022316

(2)研究分担者

なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

なし　　（　　）

研究者番号：